

こはかとなうけふりわたれるほど、るにいとよくもにたるかな、かゝる所にすむ人心に思ひのこすことは、あらしかとのたまへば、略○下

〔萬葉集九相聞〕大神大夫任長門守時集三輪河邊宴歌二首略○中

於久禮居而、吾波也將戀、春霞多奈妣久山乎、君之越去者、

〔萬葉集春十雜〕久方之天芳山、此夕霞霏微、春立下、

〔右柿本朝臣人麿歌集出

〔古今和歌集春一〕題まらす

春のきる霞の衣ぬきをうすみ山風にこそみだるべらなれ

在原行平朝臣

〔玉葉和歌集春二〕暮春歌として

式子内親王

くれてゆく春の残りをながむれば霞のそこに有明の月

〔續千載和歌集春一〕弘徽殿女御の歌合に

相摸

春のこし朝の原の八重霞日をかさねてぞ立まさりける

〔八雲御抄三上〕霞略○中

秋もよめり 万にほのうゑきりあひといへり、夏もいつも風まづかなる朝によむべしと、俊成いへり、七夕にも霞たつとよめり、

〔萬葉集二相聞〕磐姫皇后思天皇御作歌四首略○中

秋之田、穗上爾霧相朝霞、何時邊乃方二、我戀將息、

〔肥前風土記松浦郡〕賀周里在郡西北

雜載

昔者此里有土蜘蛛、名曰海松樞媛、纏向日代宮御宇天皇、景 巡國之時、遣陪從大屋田子、日下部君等祖也

誅滅時、霞四含不見物色、因曰霞里、今謂賀周里訛之也、

〔常陸國風土記行方郡〕郡南二十里香澄里、古傳曰、大足日子天皇、景 登坐下總國印波鳥見丘、留連